東方官衙北地区の調査
ー第168-1次

1　はじめに

本調査区は藤原宮の東方官衙北地区にあたり、宮内に想定される先行四条大路の道路心より約30m北に位置する。調査区は南北７m、東西14.5mで設定し、調査面積は101.5㎡。調査は2011年４月４日から４月22日まで実施した。

基本層序は、上から①現代の整地土、②中世の遺物包含層、③古墳時代以前の堆積層、④地山の順である。ただし、②層の下が地山となる部分もある。

2　検出遺構

本調査で検出した主な遺構は、南北溝３条、斜行溝２条、土坑３基である。以下に概要をのべる。

南北溝SD11080　調査区の西半分を占める大規模な素掘溝。幅9.3m、深さ60㎝。③層あるいは地山上面から掘り込む。溝の東肩は北で西に振れるが、西肩は調査区南端より1.7m北で西へ折れる。西肩は傾斜のゆるい斜面となっており、その斜面に後述する土坑SK11075をつくる。埋土からは、土器や板材が出土した。出土土器から５世紀後半と考えられる。

土坑SK11075　SD11080の西肩斜面につくられた土坑。南北2.2m、東西2.3m、深さ40㎝以上。埋土からは多量の土器が出土し、５世紀後半に比定できる。また、SD11080と同様、板材が出土し、さらに土坑の西端には２基の杭列を確認した。この杭列の他に、土坑の西北隅から、土坑の外へ北西方向に直線的にのびる杭列を確認しているが、これらの杭列はすべて一連のものと考えられる。上記の状況やSD11080の板材出土状況を勘案すると、SK11075には、西北隅に北西方向にのびる浅い溝SD11076がつき、SD11080と接続していたと考えられる。また、SK11075とSD11080、およびSD11076の西肩は杭と板材で護岸されていた可能性が高い。

斜行溝SD11076　SK11075の西北隅から北西方向にのびる溝。SK11075と同様、SD11080の西肩斜面に設けられ、SK11075とSD11080をつないでいたと推測する。溝の西肩のラインは杭列により認識したが、東肩は確認できていない。

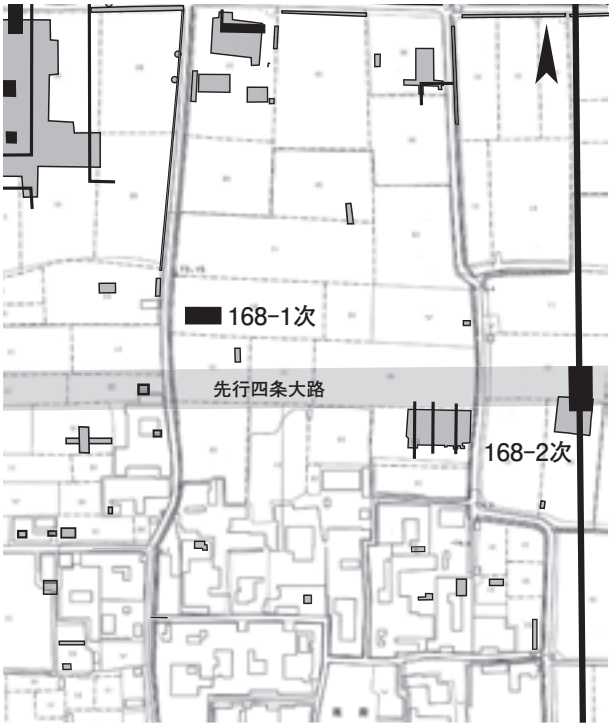

図111　第168－1次調査区位置図　1：3000

南北溝SD11079　南北溝SD11080の東で確認した幅1.9m、深さ45㎝の素掘溝。地山上面で検出した。溝の方向は北で西に振れる。土層の観察からは、SD11079とSD11080は、それぞれ溝の下半を埋めた後、一連の整地土で最終的な埋め立てがなされた状況が推測できる。溝の方向や埋め立ての状況を考慮すると、SD11079とSD11080との間に大きな時期差は想定し難い。

南北溝SD11077　調査区東端で検出した素掘溝。幅0.7～0.9m、深さ25㎝。重複関係より、後述する斜行溝SD11078より古い。

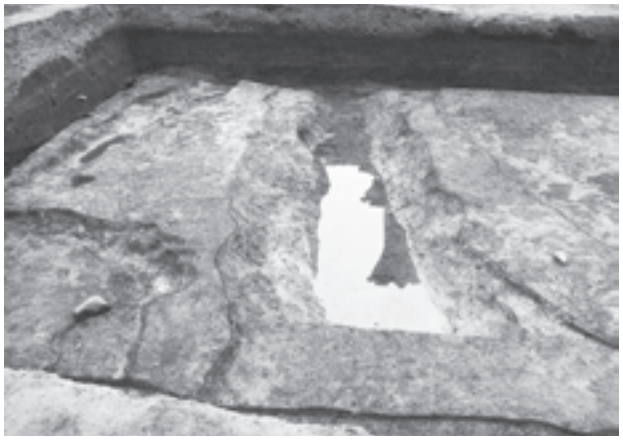
図112　調査区西半部（北から）

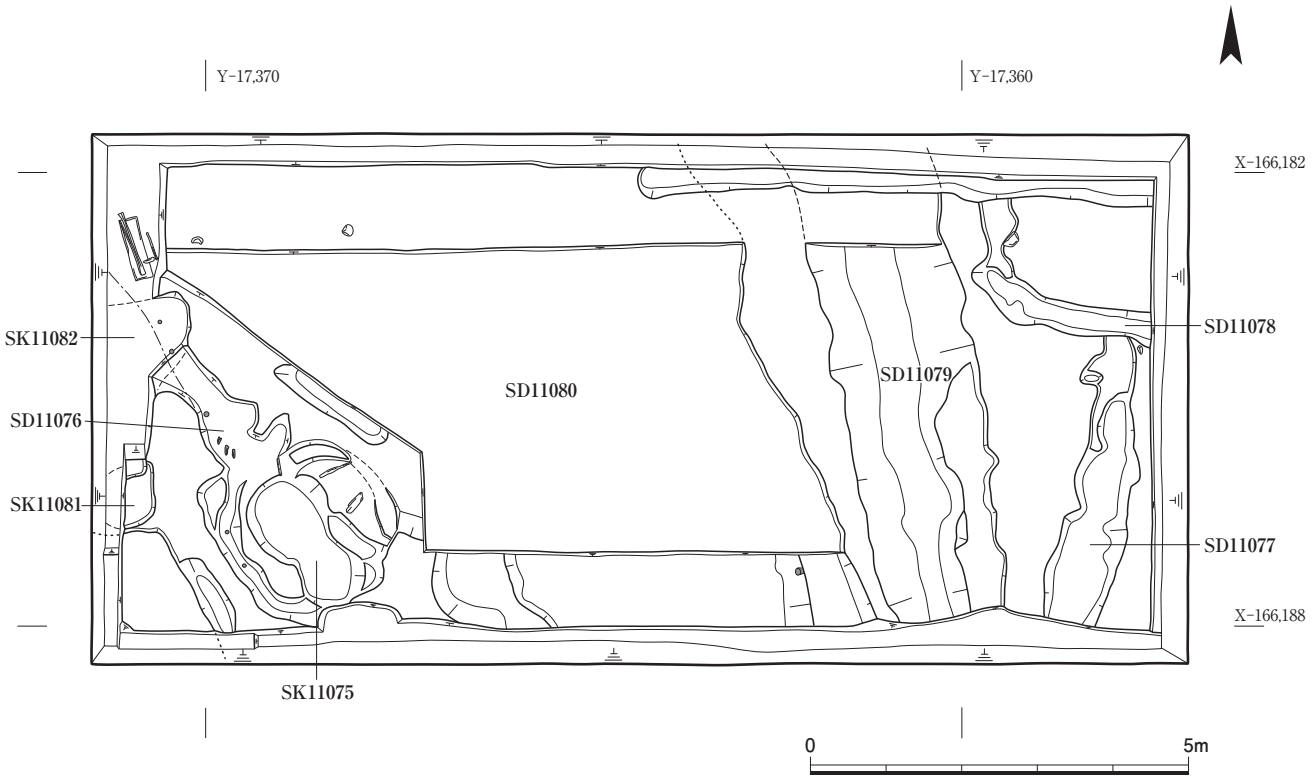

図113　第168－1次調査遺構図　1：100

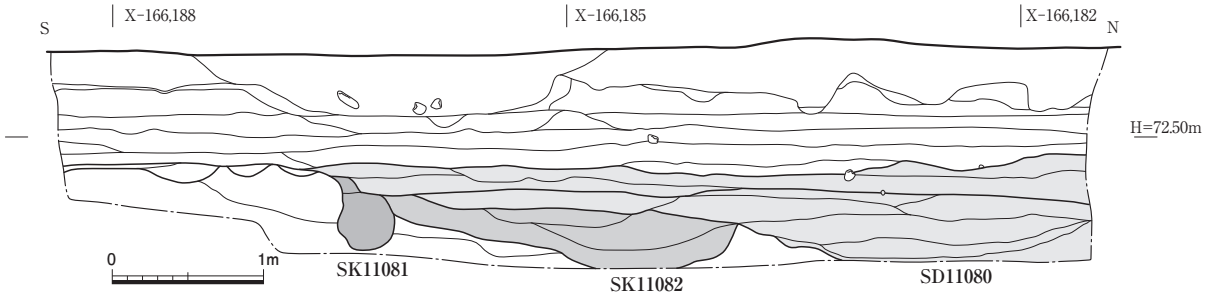

図114　西壁土層図　1：50

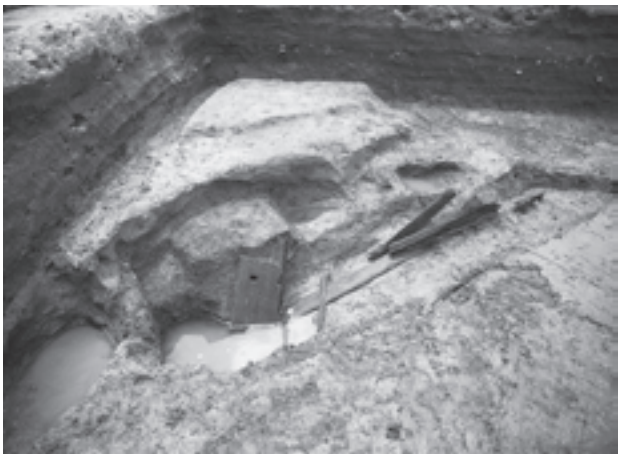

図115　SK11075部材・杭出土状況（北東から）

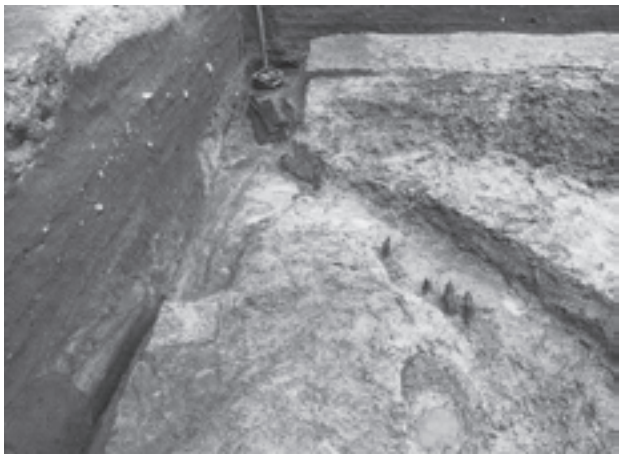

図116　SD11080部材・杭列出土状況（南から）

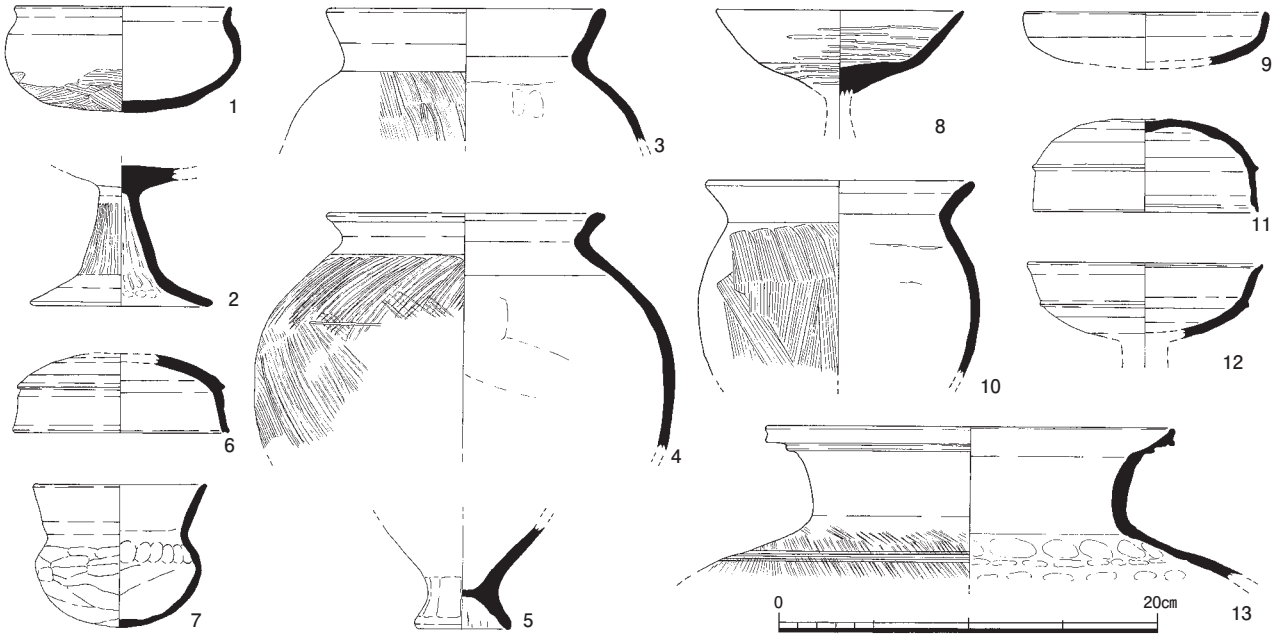

図117　第168－1次調査出土土器　1：4（1～6：SK11075、7：SK11082、8～13：SD11080）

斜行溝SD11078　調査区の東北で確認したL字状に曲がる素掘溝。幅1.4m、深さ15cm。

土坑SK11081　調査区西端南半部で検出した。南北0.9m、東西0.7m以上で、深さは50cmを測る。土坑の西端は調査区外にある。

土坑SK11082　調査区西端中央で検出した。南北2.4m、東西1.2m以上、深さ50cm以上の不整形の土坑で、西端は調査区外にある。埋土からは古墳時代の土器が出土した。重複関係より、南北溝SD11080より古く、土坑SK11081より新しい。

3　出土遺物

土 器　本調査区から出土した遺物は、大半が土器類である。整理用木箱13箱分で、土師器、須恵器、瓦器、弥生土器などがある。遺構にともなって出土した土器は、大部分が古墳時代以前のものである。ここでは比較的まとまって出土したSK11075、SD11080の土器、およびSK11082出土土器について報告する。

SK11075から出土した土器には、古墳時代の土師器（1～5）・須恵器（6）、弥生土器などがある。椀（1）は全体の8割ほどが残る。口縁部は短く直立し、底部は緩やかな丸底をなす。外面は、口縁部～胴部はヨコナデで、底部にはハケメ調整を不定方向に施す。内面は全体をヨコナデで調整する。2は高杯。脚部は完存するが、杯部を欠く。脚部はラッパ状に大きく開き、端部は丸くおさめる。外面は脚柱部に縦方向のヘラミガキを密に施し、その他はナデ調整。内面には絞り痕が残る。甕（3）の口縁部はやや内彎し、端部は丸くおさめる。口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部外面はタテハケメ調整で内面はユビオサエである。頸部内面には、粘土接合痕が残る。4・5は宇田型甕。4は短く開く口縁部をもち、口縁部上端には平坦面をつくる。肩部は強く張らず、胴部外面は目の粗いハケメで調整し、内面はナデ調整である。胴部内面には全体にコゲが残る。5は胴部下端から台部が残る。脚台部は「ハ」字状に開き、端部は丸くおさめる。杯蓋（6）は、復元口径11.5cmである。天井部と体部の境に鋭い稜をもち、口端部には明瞭な段をもつ。天井部のロクロケズリの範囲は広く、ロクロの回転は反時計回りである。内面調整はロクロナデで、中央には一方向のナデが入る。

SD11080からは、古墳時代の土師器（8～10）・須恵器（11～13）、弥生土器などが出土している。杯（9）は、底部から丸みをもって口縁部へとつながり、口端部は丸くおさめる。内外面ともナデで調整する。高杯（8）は、脚部を欠損する。口端部は薄く尖り、底部と口縁部の境は弱い稜をなす。内外面に横方向のヘラミガミを施し、丹塗りする。甕（10）は、外反する口縁部をもち、口端部には外傾する面をつくる。口縁部は内外面ともヨコナデ

調整で、胴部は外面が縦方向のハケメ、内面はナデである。胴部内面には、粘土接合痕が残る。杯蓋（11）は、復元口径12.0㎝である。口端部には明瞭な段をつくり、天井部と口縁部の境には鋭い稜をもつ。天井部のロクロケズリの範囲は広く、ロクロの回転方向は反時計回りである。無蓋高杯（12）は杯部のみが残る。口縁部はやや外に開き、口端部を斜め上方につまみ出す。口縁部と底部の境には稜を有す。底部外面はロクロケズリで、ロクロの回転方向は反時計回りである。13は甕。頸部はやや外反し、口縁部に段をつくる。口縁部は内外面ともロクロナデで調整する。肩部外面はタタキ調整で、内面は当て具の痕跡をナデにより消している。

７はSK11082から出土した小形丸底壺である。粗製品で、口縁部は直線的に開き、体部は球形を呈す。外面調整は、口縁部から体部上半がヨコナデで、体部下半から底部はナデ調整である。頸部内面には粘土接合痕が明瞭に残る。

出土土器の様相からは、SK11075、SD11080に年代的な隔たりはなく、両者とも５世紀後半に位置づけられる。またSK11082から出土した小形丸底壺は、布留式新段階に比定でき、古墳時代前期後半に位置づけられる。（若杉智宏）

瓦類　軒丸瓦１点、軒平瓦１点、丸瓦40点（4.42kg）、平瓦97点（4.89 kg）が出土し、道具瓦は面戸瓦１点、熨斗瓦１点、隅木蓋瓦と考えられる小片が１点出土している。軒丸瓦は小片だが、6281型式と考えられる。軒平瓦は段顎の剥離部片で、下外区の鋸歯文がわずかに残るものの、型式は不明。軒瓦は２点とも中世の遺物包含層から出土した。（橋本美佳）

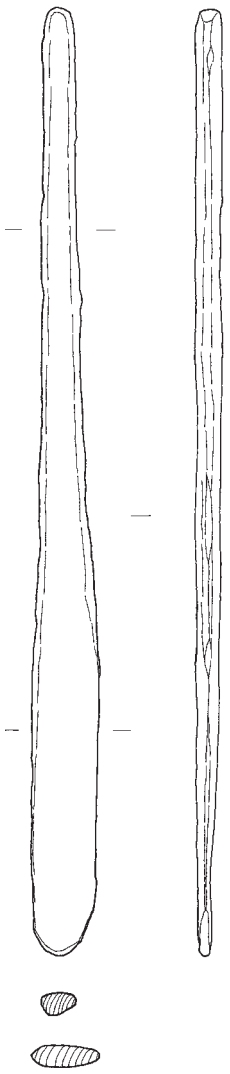

図118　ヘラ　１：３

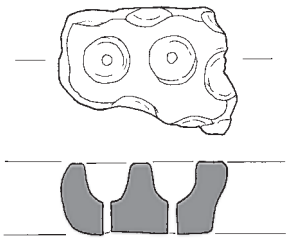

図119　ガラス小玉鋳型　１：１

木製品・土製品・石製品　主要な遺物として、木製品はSK11075からヘラが１点出土した（図118）。全長37.8㎝、最大幅2.6㎝。完形品だが保存状態はあまり良好ではない。土製品は、中世の遺物包含層からガラス小玉の鋳型が１点出土した（図119）。片面に多数配された小孔は直径６㎜、深さ５㎜ほどを測り、中央を直径１㎜ほどの細孔が貫通している。飛鳥池遺跡（『藤原概報 22』）などに類例があるが、本品の小孔は比較的深い。このほか石製品はサヌカイト剥片がSD11080などから計５点出土している。種実類は、SD11080、SK11075などからモモ・ウメの核、ウリ類の種子が出土している。（石橋茂登）

また、SD11080、SK11075から木製部材が出土した。前節で述べたように溝や土坑の護岸に用いられていたと推測される板材である。板材のいくつかには、護岸材では必要のない枘穴や太枘穴とみられる仕口があり、転用されたものであることがわかるが、何に用いられていた部材であるかは不明である。

４　まとめ

今回の調査では、南北溝３条、斜行溝２条、土坑３基などを検出した。そのなかでも、SD11080は幅9.3ｍの非常に大規模な溝で、西肩にはSK11075がつくり付けられている状況が確認できた。これらの遺構からは多量の土器が出土し、その様相から年代は５世紀後半に比定できる。両遺構の西肩は、杭や板材を用いて護岸されていたと推測できる。遺構の西肩がある調査区西端付近は、基盤となる地山が細砂層となっており、特に地盤がゆるかったと考えられる。そのため、杭などを用い補強したのであろう。

また、本調査区は藤原宮の東方官衙地区にあたるが、今回の調査で藤原宮期の遺構は検出できなかった。古墳時代の大溝SD11080の存在や土層の状況を考慮すると、藤原宮期の整地土は後世に大きく削平を受けたと推測する。（若杉）